

安全保障や少子化対策についての財源議論が沸騰している。国債でいいのか、消費増税などの新たな課税が必要なのかとの議論である。こうした議論に決定的にともいえるほど欠けているのは、「安定財源とは経済成長の結果生まれる」という基本中の基本である。

経済成長の不可欠性

国連などの統計を見ても、日本は世界のなかでほとんど唯一といっていいほど経済成長しない国となってしまう。一九九五年から二〇一七年の二二年間を見ると、経済が成長するどころか、名目経済成長率がマイナスであったのは、内戦相次ぐリビアと日本だけだったのだ。

そのため、当然のことだが税収が全く伸びず、一九九五年に六〇兆円だった一般会計税収は、二〇二二年現在でも七〇兆円すら超えることができないでいる。ところが、アメリカを見てみると、同じ期間に経済は三・五倍、四・〇倍程度に成長したから、税収も三倍以上の伸びを得ていたのだ。

いま、少子化対策は子ども手当などの支給問題に収斂しているが、少子化問題の本質の一つが「かわいいわが子が暮らしていくことになる明るい未来の日本」がまるで見えず、逆に「税で苦しむ子供の将来」がほの見えることにある。

このためには、経済的にも人材的にも集積度の高い首都圏を牽引車として、日本経済の成長を取り戻さなければならぬ。その象徴が、東京湾口道路なのである。それが将来に向けて変化し成長する日本の姿として、日本人を叱咤激励するのだ。

東京湾口道路（湾口架橋）は、千葉県富津市富津崎辺りから神奈川県横須賀市観音崎付近を橋梁で結ぶというものである。

この道路により、東関東自動車道、東京湾岸道路、横浜横須賀道路が環状道路としてネットワークを構成し有機的に連結されることになる。さらに首都圏中央連絡自動車道は、東京湾横断道路（東京湾ア

路整備の意味

東京湾口道

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

下言上用

Kagen

Jouyo

張を示しているのである。

もし、日本がアメリカ並みに経済成長できておれば、直近の税収は一八〇兆円にもなっていたはずなのだ。一般会計歳出は一〇〇兆円規模であるから、一円の国債発行もな

く財政が運営できていたのだ。

安全保障議論では、アメリカの戦闘機やミサイルを購入することが議論されているが、もしこの資金を税金で調達すればアメリカのGDPを押し上げることにはなるが、日本は国内で使える金が減少して「日本のGDPは必ず減少する」ことになる。その結果、「日本の税収は減少していく」のである。これは可能性の話ではなく必然的にそうなるのだ。

ところが、国民の生命を守るために地下シェルターを設置していくのであれば、資金が日本に投資されることになり国内に資金が循環して、日本経済は成長するのだが、その議論は、どこにも全くない有様だ。

税収増のためには経済成長が不可欠で、そのためには国内投資が伸びることが絶対的に必要である。

クアライン）を経て関東大環状道路を形成するのだが、東京湾口道路が加わることでさらに大環状の道路網ができることになる。

環状道路の効用には「連結の実性の向上」があるが、環状の意義には「中心性を解消する」ということがある。例えば、湾岸道路が東京から千葉・館山に延び、また東京から横浜・横須賀に延びても、館山と横須賀が結ばれない限り、中心は東京であり続ける。ところが、館山と横須賀が結ばれると、この環状道路上の都市や地域は「どこもが中心になり得る」のである。

国土計画的には、東京首都圏への集中は緩和して、企業・行政・学術の中心機能はより全国的に展開させておく必要がある。それは今日議論になっている安全保障上の見地もあるし、近い将来の大災害に備えたり、緑と空間の豊かな地での子育てという捉え方もある。

しかし、首都圏は資金、人材などの点から見ると他地域を圧倒的に凌駕するポテンシャルを有している。経済が全く成長しない三〇年を

従って、国民が明るい未来を感じることで、経済成長に資する将来のための投資を考えなければならぬのである。

安全保障を唱えるのであれば、国民の生命財産を守る地下シェルターの整備と、世界の先進国で唯一ともいえる林立する電柱を抱えて災害と攻撃に対して脆弱な都市の構造改革が欠かせない。

その人々に希望を与え、経済を成長させる国土への働きかけの象徴として、東京湾の湾口に架橋することは大いに意味があると考えるのである。

東京湾口道路の必要・日本再生の象徴

本州と四国を橋梁群で一体化し、津軽海峡にトンネルを掘って北海道と本州を連結するというプロジェクトが動いていたのは、かなり昔の話となってしまった。当時の日本人は、「近い将来、全国をヒトやモノが自由に便利に往き来することができるようになる日本」を描きながら

経た日本は、緊縮財政から脱却して成長し、より豊かな暮らしができる国にしなければならぬが、それを牽引できるのは首都圏のパワーなのだ。

それを引き出す要となるのが、人々に、より躍動する日本の近未来を予想させるこのプロジェクトなのである。長い間の技術的検討の結果、現段階で構想されている橋梁の支間長八六〇十二、二五〇十八六〇以、基礎の設置深度六〇〜七〇以は技術的には明石海峡大橋の若干の延長線にあって建設可能とされている。

世界に冠たる技術力で整備された壮麗な世界一の中央径間の橋梁が、東京湾口で世界の船舶を受け入れられるなんてなんと誇らしいことではないか。交通の効率化によって投資額以上の経済効果が確実に見込めるこのゲートと、転落国家からの反攻攻勢の象徴として眺める日本人は、再び元気を取り戻し、国家再生への決意を新たにすることに違いないのである。